（10）『韓国民族文化大百科事典』一九九五　韓国精神文化研究院（現在の韓国学中央研究院）の「ソンニムクッ」項参照。

参考文献（年代順に掲出。韓国語文は日本語訳した）
李能和「朝鮮巫俗考」『啓明』第19号　一九二九　啓明倶楽部
金泰坤『韓国巫歌集1』一九七一　集文堂
崔正如・徐大錫『東海岸巫歌研究』一九七五　螢雪出版社
柳東植『朝鮮のシャーマニズム』一九七六　学生社（日本）
徐大錫『韓国巫歌の研究』一九八〇　文学思想社
金泰坤『韓国巫俗研究』一九八一　集文堂
崔吉城『韓国のシャーマニズム』一九八一　弘文堂（日本）
金泰坤『韓国の巫俗神話』一九八五　集文堂
金仁會『韓国巫俗思想研究』一九八七　集文堂
黄縷詩「ムーダンクンノリ研究」一九八七　梨花女子大学大学院博士論文
金善豊・金秀南（写真）『韓国のクッ19　江陵端午クッ』一九八七　悦話堂
徐大錫・朴敬伸『安城巫歌』一九九〇　集文堂
金善豊『江陵端午祭実測調査研究書』一九九四　韓国文化財管理局
曺敬燉編『江陵端午祭・白書』一九九九　江陵文化院
黄縷詩「東海岸クッの伝承状況と特徴」『韓国巫俗学』第17号　二〇〇八
李杜鉉「マーマ拝送クッ」『韓国文化人類学』第41巻2号、二〇〇八
シンヒラ「「江陵端午クッ」伝承者研究」二〇一五　カトリック関東大学大学院碩士論文
パクヘミ「「ソンニムクッ」の伝承様相―江陵端午クッ伝承巫女のソンニムクッ採録本を中心に―」二〇二〇・二　韓国芸術総合学校芸術専門士論文

付記

二〇二〇年度の「江陵端午祭」は、新型コロナ感染症の防疫対策によってオンラインでの実況中継が行われた。六月二十四日（旧五月四日）から二十八日まで挙行された〈단오굿〉（端午クッ）のすべての儀礼をユーチューブで鑑賞できる。朴琴天（パククムチョン）巫の「ソンニムクッ」は二十五日にあり、「コロナ19」をとりあげ祈願していた。巫と楽士だけなので、例年のような観衆が参加した生き生きとしたクッ儀礼の臨場感までは望めないが、黄縷詩教授の解説も付いておりぜひ参照されたい。

〈2020 온라인 강릉단오제〉https://2020.danojefestival.or.kr

（ぴょん・うんじょん／元関西外国語大学助教授）

【緊急特集　新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】

カランチン期ロシアのフォークロアより

熊野谷　葉子

ロシア・フォークロアのユーモア

ロシア・フォークロアにおいて笑いは重要な位置を占めている。昔話の艶笑譚や政治風刺のアネクドート（小話）が有名だが、その他にも、なにげなく慣用句やことわざを言い換えたり、高尚な格言や文学の有名な詩句をパロディ化したりして、ロシアの人々は日々笑いのフォークロアを生み出してきた。そのユーモア精神は困難な状況にあるほどかきたてられるらしく、ソ連時代の言論の不自由な状況下で、あるいはソ連崩壊後の苦しい生活の中で、人々は困っている自分たちの姿を客観的に観察し、それをユーモラスに描いて笑い合ってきた。そうした笑いのフォークロアのテキストは、口頭で語られて証拠を残さないか、路上などで売られるホチキス止めの小冊子となって手軽に消費された。

しかし二十一世紀、ロシア経済が何度も深刻な危機に見舞われつつも成長し、生活が向上して国力に自信がついてくると、こうした笑いは輝きを失った。誰もが忙しく仕事をこなし、ひっきりなしに流れる写真と動画と文字を目で追う暮らしは他の先進諸国と変わらない。かつてはよく見られた、路上での知らない者どうしの政治談議やキッチンの片隅でのアネクドート大会は、誰かのギターに合わせて皆が歌うという光景同様、レトロな思い出になりつつあった。そうした中で、笑いの復権が見られたのが、二〇二〇年三月に始まったコロナ禍中の暮らしである。

「カランチン」の春

二月にはまだ「中国の感染症」扱いだった新型コロナウイルス感染症は、三月に入るとロシアでも急速に広まり、政府の対応も極めて早かった。感染者がまだごく少なかった三月上旬から次々に入国制限や休校の措置がとられ、私も三月七日に予定

していたウラジオストクへの旅行を直前に取りやめた。強行することは可能だったが、もしかしたら飛行機に乗ったまま送り返されるのではないか、あるいは空港で二週間監禁されるのではないかと思われたし、少なくともアジア人の入国や観光が喜ばれるような雰囲気ではなかった。

こうして、ロシア全土で店舗やレストランが営業を停止し、大人も子供も在宅し、近所へ買い物に行くにもネットで許可をとる、という、日本よりはるかに厳しい巣ごもり生活、通称「カランチン」が始まった。このカランチンという語は本来かなり厳格な防疫的隔離措置を意味し、ロシアの感染症対策措置は公式には「自己隔離」と称されたのだが、人々はカランチンという語を好んで使った。例年なら長い冬のあとの暖かい陽射しを全身で受けるべき三月、四月、夜中まで明るい宵の散歩を楽しむ五月に、狭い家の中で一日中家族と顔を付き合わせ、パソコンやスマホの窓から世界を眺める生活は、気分的にはカランチンと呼ぶにふさわしいものだったのだろう。

彼らが自宅からこうして見ている世界に、私もPCの画面から入り、うろつくうちに気づいたのが、じわじわと伸長するきわめて庶民的な笑いだった。三月には、ガスマスクをかぶって教室に集合している子供たちやマスク代わりに半割のタマネギで口と鼻を覆ったおじさんなど、受けを狙ってわざわざ撮影したような写真が多かったが、四月に入るころには巣ごもり生活中のよくある光景が、具体的に、笑いとともに語られるようになった。それはどこか八〇～九〇年代のロシアを思わせる、懐かしいような光景であった。本稿ではそうしたコロナ禍中のロシアのフォークロア的ユーモアから私が目にした具体例をいくつか紹介しようと思う。

矛盾を笑う

未知のウイルスに関する言説やそれに立ち向かうための方策はどこの国でも矛盾だらけで、それがまず笑いの対象となった。以下にあげるのは四月初め頃に頻繁に目にした「コロナウイルスについて現時点で明らかになっている情報」というリスト形式の投稿である。ここにあげたのはリストの上位に入っていた数項目だが、紙面の都合上、ヴァリアントは（　）に入れてまとめたことを断っておく。

コロナウイルスについて現時点で明らかになっている情報は以下の通り。

1. 外出は不可だが、必要なら可。
2. マスク（手袋）は役に立たないが、着用は必須。
3. 商店は閉めるが、必要なら開ける。
4. 病院に行っても治らないが、受診は必須。
5. このウイルスは致死性だが、恐れる必要はない。
6. みな家にこもっているが、ブラブラしている。
7. スーパーには食糧がふんだんにあるが、皆には行き渡らない。
8. このウイルスは子供には作用しないが、子供たちは危険にさらされている。
9. 症状は多岐にわたるが、無症状でも罹患しているかもしれない。
10. 予防には運動（戸外での散歩）がよいが、ジム通いもランニングも禁止（特に公園は不可）。
11. 肥満はリスクを高めるが、外を出歩くよりは食っちゃ寝を推奨する。
12. 高齢者の家へは近寄ってはいけないが、食料品と医薬品を届けるべし。

投稿によって、リスト内の項目数と内容はまちまちである。投稿を読んだ人が自分でも項目を足し引きして再投稿するのだろう。このリストは日本語や英語のSNS上でも見られたと言うからおそらくロシア発ではないのだろうが、面白いのは起源よりも反映されたそれぞれの国の事情で、ロシア語バージョンはロシアらしい内容になっている。例えば2.の手袋着用や10.の公園閉鎖、12.の高齢者への食糧配達などは日本ではあまりピンとこないが、ロシアでは行われていたことである。この他にも「罰金類に法的根拠はないが、切符は切られる」という外出取り締まりの罰金制度を揶揄する項目や、「失業者には一万九千五百ルーブルが約束されるが、職業安定所では受付を拒否している」といったやけに具体的な項目も見られ、ロシアのカランチン生活の中で人々が何に違和感を覚え、何に苦笑していたのかがわかる。作者が特定されないまま、伝達する人たちが少しずつ形を変えることで形成されるこうしたテキストは、きわめてフォークロア的な現象と言えるのではないだろうか。

ことわざをもじる

冒頭でも述べたように、フォークロアの中でも最も日常的で、ふとした会話の中に挿入されるのがことわざや成句である。日本なら例えば「ほんとに人生万事塞翁が馬っていうか、何がどう転ぶかわからないものよね」というように、常識としてポコポコ出てくるのだが、コロナ禍中ではこうした伝統的なことわざがもじられた「新作ことわざ」が出現したらしい。以下はロシア科学アカデミーのウイルス学者フョードル・エルショフ氏の蒐集によるとしてニュースサイトに掲載された「ウイルス学者が収集したユニークなコロナウイルスことわざ[1]」からの抜粋である。もとのことわざと、そのコロナウイルスバージョンをあわせて紹介しよう。

・「言葉は雀ではない。飛び立ったが最後つかまらない」という「失言には注意せよ」を意味することわざは、「**ウイルスは雀ではない。飛び立ったが最後つかまらない**」に変身した。

・歴史的背景をもつ有名なことわざ「招かれざる客はタタールより悪い」は、コロナ禍中では「**招かれざる客は感染者より悪い**」となった。
・「真の友は不幸の中でこそ分かる」という奥深いことわざは「**真の友はソーシャル・ディスタンスの中でこそ分かる**」と書き換えられた。
・「大事なもの、それは食事時のスプーン」というもっともな言い回しは「**大事なもの、それは疫病時のトイレットペーパー**」に姿を変えた。トイレットペーパーの買い占めに走ったのは日本人だけではなかったのだ。
・分かりやすくシンプルなことわざ「**百年生きて百年学べ**」は「百年生きて百年治せ」とちょっと悲しい内容になった。
・郷土愛にみちたロシア人らしい「生まれ故郷でこそ人は本領を発揮する」ということわざも「**生まれ故郷でこそじっとカランチンに耐えろ**」に変わった。
・「神に祈り、お前はしくじるな」は我々の「人事を尽くして天命を待つ」に近い意味だが、コロナ禍中では「**神に祈り、手を洗え！**」と身も蓋もない表現になってしまった。
・「約束から実行まで三年」という諦めのような成句はもともとあったが、一言加えて「**ワクチンの約束から実行まで三年**」としたことで、急にコロナ時代の言葉となった。

このように様々なことわざがコロナ禍用に作り変えられたが、量が増えれば質も多様化し、ついには「最後に笑う者が最もよく笑う」という「今に見ていろ！」的な意味のことわざから「**最後にくしゃみする者が最もくしゃみする**」という新作ができた。こうなるとほとんど意味がない。もじるという行為そのものを笑っているのである。

フォークロア・パフォーマンス

さて、ここまで紹介してきたのはインターネット上に文字情報の形で流れてきたものだが、パフォーマンスでユーモラスなフォークロアの実演を試みた人たちもいる。四月のある日、私がロシアで最も使われているＳＮＳである Vkontakte を眺めていたところ、目を引く動画が流れてきた。場所は、高層住宅が立ち並ぶよくある郊外の住宅地、何棟ものマンションが広い中庭に面しているが、歩いている人はまばらだ。外出制限のおかげで人々はみな窓の内側にこもっているのである。カメラは、その中庭の真ん中に据えられたベンチに座る、全身白い防護服でマスクをつけた二人組の男を映し出した。彼らは抱えているロシア式アコーディオンを鳴らし出す。この楽器の音量はけっこうなものだから、マンションの住人達が何だ何だと窓から顔を出した。二人組は自らの伴奏に合わせてこんな歌を歌い出した。

カランチンでひきこもり
でも退屈してる暇はない
バラライカは弾いてるし
英語の勉強はしてるし

これはチャストゥーシカというロシアの小唄で、一つ一つはごく短い。アコーディオンやバラライカの伴奏に合わせて、誰かが一つ歌ったら数秒あけて次の人が歌い、また誰かが歌い…という風に次々に歌いつないでいく。テンポが速く踊りがつくことも多い、陽気な民謡の一種である。その時その時の話題を歌いこんだり、即興的に作ったりして歌われてきたものなので、自己隔離中の状況を歌った防護服の二人は、れっきとした伝統文化の継承を行っていることになる。

二人は、このチャストゥーカを皮切りに陽気なチャストゥーシカを5分ほど披露して引き揚げていった。周囲のマンションの住人達は拍手喝采、動画のコメントも「すばらしい！」「私の町にも来て！」と皆大喜びだ。私もこの粋なパフォーマンスがたいへん気に入ったので、投稿された動画の元をたどって演奏者本人を探した。今の世の中パフォーマーと視聴者の壁はごく薄い。最初にこの動画を見てから数時間後にはもう、私はこの防護服の一人とＳＮＳ上の「友達」になり、ビデオチャットで会話していた。ローモフさんというその方は音楽家で、民族楽器の蒐集や展示をしながら、それを使った様々なパフォーマンスも行っている。私がカランチン下のチャストゥーシカに興味があるというと、すぐに自分と友人たちが作ったチャストゥーシカをいくつも教えてくれた。前述の動画はあっという間に一万回再生を突破し、十日あまりで七万回を越えたが、この間に寄せられた多くのコメントに否定的なものは一つもなかったそうである。この動画はモスクワ州のニュースサイトも掲載された。[2]

私はこの話を勤務先の大学のＨＰでも「コロナ禍と戦うロシアのユーモア」として紹介したが、[3] ローモフ氏が教えてくれたカランチン・チャストゥーシカの大半はそこには掲載できなかったので、以下にいくつか紹介しよう。

カランチン・チャストゥーシカ

伝統的なチャストゥーシカの最大のテーマは恋愛だが、カランチン・チャストゥーシカでは恋愛の形もちょっと変わってしまう。

以前は近所のターニャに会うと
熱いキッスをしてたけど
この頃彼女の顔見ると
急いで肘で口隠す

飛沫感染防止である。マスクがない場合はハンカチで、それもなければ肘で口を覆うようにと言われているのだ。コロナ禍で恋人とデートする機会は激減したが、恋人に替わってチャストゥーシカの主要な登場人物となったのは、始終顔を付き合わせている家人である。

家に彼女とこもりきり
でも運動はしているよ
冷蔵庫開けて中を見て
その周りをランニング

犬の散歩に妻が行く
まるで地下活動家だね
犬にはしっかり口輪して
彼女はガスマスクして

夜も家、昼も家、
やる気もないし仕事もない
せめて犬の格好して
お散歩に行きたいワン

巣ごもりによる運動不足は狭い家の中では解消のしようもなく、つい冷蔵庫をあけて食べてしまうのは我々も同じである。続く二つの犬に関する歌は、外出禁止の特例として犬の散歩は許されていたという事情を知っているとわかりやすい。外へ出たいがために犬の貸し借りをするという光景も、小話や一コマ漫画ではよく取り上げられていた。

カランチンにあたって人々がトイレットペーパーを買った話はすでに書いたが、買い占めたのはもちろんそれだけではない。食料品、特に保存のきく主食は大量に買い込まれ台所に保管された。

問屋で買ったパスタには
ぜんぶ責任持ちますよ
ほらね、こうして食べている
お口直しにソバ粥も

ソバ粥というのは、ソバの実を粉に挽いて麺にするのではなく粒のままゆで、バターなどをのせて粥として食べるものだ。肉や魚の付け合わせに出すことも多い。実はロシアはソバの生産高世界一で、しかもそのほとんどを輸出せず自家消費している。経済危機の噂がでると真っ先にソバ粒を買いこむというソバ好きなのである。

日本に比べるとはるかに市民の政治意識が高いロシアでは、政治家の発言や政策についても口の端に上ることが多く、流行した文句の何割かは成句化する。コロナ対策に関しては病院建設などの大型事業や補助金の支給が話題になっていた。

みんな仕事がなくなった
補助が出るって、しっかりねって
約束したよね、モスクワ州
一人一万五千ルーブル

大統領が励ましてくれた
心配ないって言っていた
「金はない、頑張りたまえ」
健康とズボンもないのだが

補助金は約束されたものの、実際の支給は大幅に遅れたのだろう。コロナ禍による失職や収入の激減はもちろんロシアでも大問題である。大統領の励ましに関する歌の「金はない、頑張りたまえ」は、数年前にメドヴェージェフ首相が言い放ったもので、その後、政治家の無責任な発言として成句化している。ちなみにズボンには特に意味はなく、韻を踏むためにおかれた単語である。

カランチン・チャストゥーシカはまだまだあり、子供たちの家での勉強やマスクの不足なども歌われた。しかしその大半は口頭でさらっと歌われ、笑いをとっては流れていくもので、ほとんど記録されず、忘れられる運命にある。

本稿では二〇二〇年三月から五月にかけて主にインターネット上で見られたロシア・フォークロアの一端を紹介した。その後厳しい自己隔離政策は解除され、六月に素晴らしい夏が到来すると人々はマスクを外して広大な国土のあちこちへ出かけていった。SNS上に次々に投稿される写真では、鬱屈した三か月間を取り戻そうとするかのように森や湖や山頂でくつろぐ人々の姿が見られた。その光景は眩しかったが、カランチンの間じゅう室内からネット世界へ発信されていたあのユーモア精神は、夏の陽射しのもとで溶けてしまったようだった。

注

（1）https://www.mk.ru/social/2020/08/30/virusolog-sobral-unikalnuyu-kollekciyu-poslovic-pro-koronavirus.html
（2）https://mosregtoday.ru/soc/muzhskoy-duet-v-zaschitnyh-kostyumah-ustroil-protivovirusnyy-koncert-v-zheleznodorozhnom/
（3）http://www.flang.keio.ac.jp/plurilingualism/column006.html

（くまのや・ようこ／慶應義塾大学准教授）